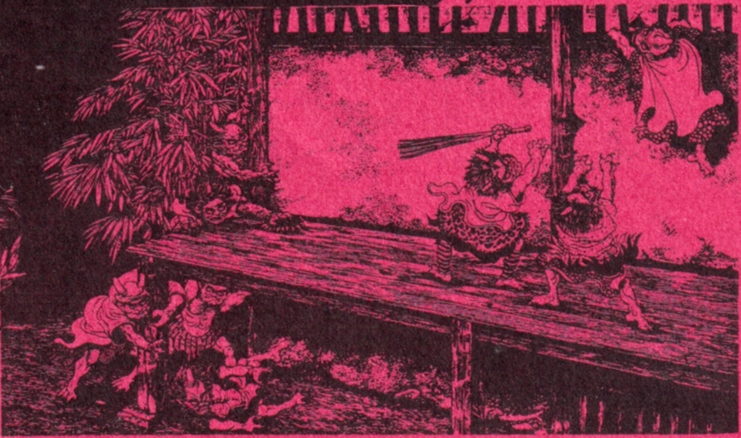
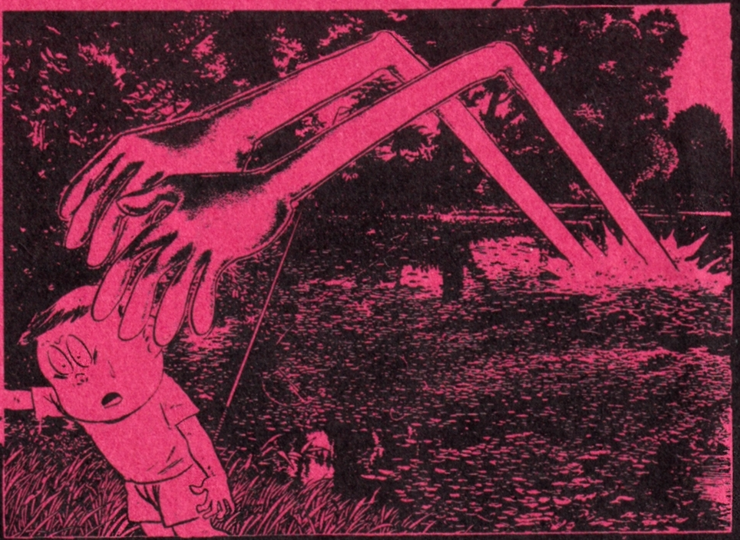
水木伝説





非売品
シリーズ

壱



もくじ

水木しげるの妖怪ポスト

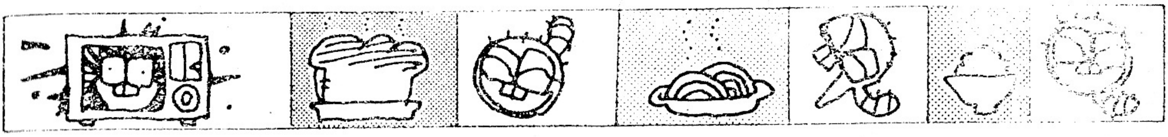
第１回／怪しき黒いもの ―――― ４～５
第２回／音の怪 ―――― ６～７
第３回／霧の様なもの ―――― ８～９
第４回／闇に響く声 ―――― 10～11
第５回／真夜中の火 ―――― 12～13
第６回／髪がしばる ―――― 14～15
第７回／闇の迷路 ―――― 16～17
第８回／伸びる手の怪 ―――― 18～19
第９回／枕元にいるもの ―――― 20～21
第10回／ただよう光 ―――― 22～23
第11回／蛇のはなし ―――― 24～25
第12回／影女 ―――― 26～27
第13回／真昼の人影 ―――― 28～29
最終回／その１　ノックの音が… ―――― 30～31
　　　　その２　立ちはだかるもの ―――― 32～33
―妖怪ポスト 第12回 影女―の解(快?怪?)説 ―――― ３４
あとがき ―――― ３５

★「水木しげるの妖怪ポスト」は“少年キャプテン”(徳間書店刊)1990年2月号(1990年1月26日発行)より1991年3月号(1991年2月26日発行)まで、連載されたものです。
尚、この小冊子は、1992年夏「ゲゲゲの鬼太郎・4度目のアニメ化署名運動」に協力していただいた方々と、一部の関係者及び「水木しげるFC・水木伝説」の運営に協力されている方々に配布する非売品です。



水木しげるの
妖怪ポスト

水木伝説非売品シリーズ—１





水木しげるの妖怪ポスト

第1回／怪しき黒いもの

〈ごはんですよ計画〉の目玉商品がこのコーナー。鬼太郎・河童の三平・悪魔くんと妖怪たちとつきあって数十年という水木先生が、あなたの身近でおこった奇妙な現象の原因をピタリと当てる"妖怪ポスト"。

カラーンコローンのゲタの音をBGMに、これまで目に見えなかったさまざまな妖怪が白昼のもと登場いたします。

今月の手紙

ぼくは以前にまっ黒な変なものを見たことがあります。ある夏、近所の人と花火大会をしていた時のことでした。

ぼくが鉄棒にぶらさがっていると、その鉄棒の柱のところに全身まっ黒な者がいるのです。ぼくは友だちだと思って「かづひろ君」と聞くと、ぼくより右側の方から返事がきたので、いそいでその柱を見ました。するとその黒いものはもういませんでした。

あれはいったいなんだったのでしょう

（武蔵野市・白石寛）

怪奇よろずごと相談

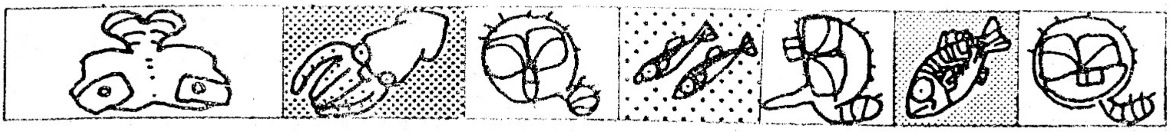
なるほど。その怪しき黒いものというのは三つの妖怪が考えられます。

第一には**土用坊主**（どようぼうず）という妖怪。これは神奈川県津久井郡などで土用（立夏の前の十八日間のこと）になると、坊主の姿で土の中からニューキと現れるというものです。

この地方では、土を動かすことは、「土用坊主」の頭を引っかくことになるので、土用の間は草むしりはしないことになっています。

第二には**黒髪切**（くろかみきり）という妖怪で、むかし夜中に通行人の髪を切っていました。切られた者はいつ切られたのかサッパリわからない。あわてて引き返してみると、結ったままの髪が道におちており、これは妖怪「黒髪切」のしわざであるとされました。

異国より悪魔の風の吹きにくるなこ吹きもどせ伊勢の神風」というまじないをかんざしにつけるとよいと



いわれましたが、あまり効き目はなかったようです。

三つめは、島根県石見地方に現れる、一つ目の妖怪で**ノウマ**。これは夜一人歩きしている者がいると、音もなくニューッと現れて、人を食べたといわれます。

たぶん、こういったもののどれかが、白石君が見たという妖怪ではないかと思われます。

妖怪というのは、目でしっかり見たり、手でさわったりすることはできないものです。ある種の感じといったようなものですから、なかなか気づくのも大変だし、確かめるのはとてもむずかしい存在です。

だから人に「そんなものいるわけがない」といわれても、なかなか反論することのできにくいものです。

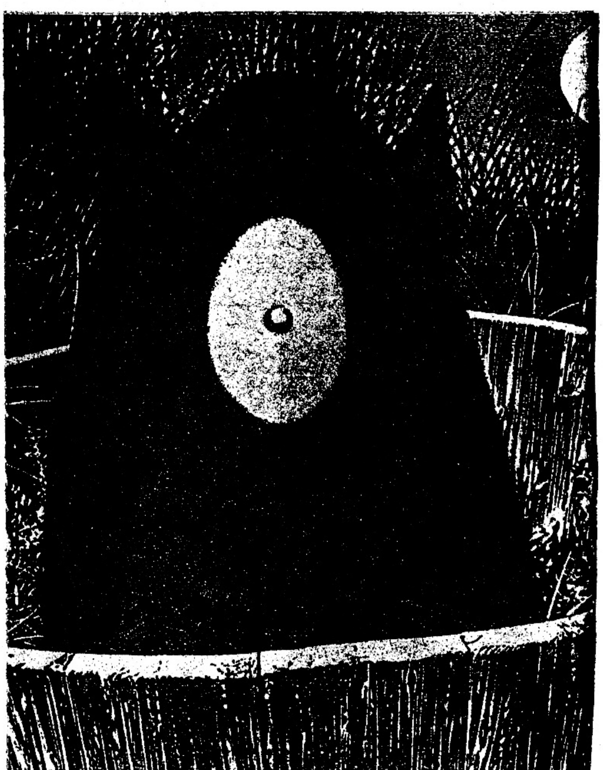
我々の五感（視・聴・嗅・味・触）では捕えにくい存在なのですから、気長に観察するしかないと思います。

読者のみなさん、不思議な体験がありましたら、どしどし「妖怪ポスト」に知らせてください。必ず、それは妖怪なになにであるという回答をいたします。



黒髪切





ノウマ

怪奇よろずごと相談

今月の手紙

大阪市／清水正己君

それは私が兵庫県のある山村を、父と二人で歩いていた時のことです。街道の周りに人家はなく、あたりがだんだんと暗くなってきた頃ヒタヒタとゾウリの足音が後から追いかけてきます。気になって振りむくと誰もいず、足音も消えてしまいました。が、歩きだしますと、また足音がきこえてきます。

やがてその土地にすむお百姓さんと会い、その件を話しますと「そんなの、この辺では珍しくありませんよ。心配することはありません。妖怪のしわざですよ。からかっているのです」といって、平気な顔でスタスタと行ってしまいました。

あれは、いったいなんだったのでしょうか。

ちなみに、母は最近、靴の足音のそれとも出会っているそうです。



水木しげるの妖怪ポスト

第2回『音の怪』

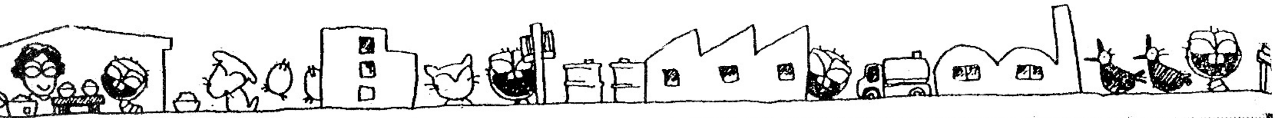
おこたえ

これは、あきらかに**べとべとさん**である。

しかも附近にすむ人は、あたりまえのように「妖怪のしわざですよ、からかっているのです」と、スタスタと去ったというから、このあたりには、かなりたくさんの「べとべとさん」がいると思われる。

しかも最近では、靴の音をさせるのもあらわれているというのだから驚く。

たいていは夕方だが、我々がそれに出会った場合



「べとべとさん、先へおこし」

といえば、彼はスタスタと去るわけで、無用な恐怖を感じる必要はまったくない。

諸君が、万一『べとべとさん』に出会うという光栄によくした場合には、諸君はあわてず、さわがず、冷静に観察し、僕のところに知らせてほしい。

辛抱強く調査することによって、我我に理解できる妖怪の姿が浮かび上がってくる!!

妖怪発見には、かなりの忍耐が必要なのだ。

妖怪は一般に〝音〟であらわれるのが主で、なかなか姿までは見せない。「火の玉」のたぐいとか「見上げ入道」のたぐい以外は、たいてい〝音〟である。

ここに妖怪のヒミツがかくされているのかもしれない。

じつをいえば、僕も子供の時に「べとべとさん体験」を味わっている。

——夜、海岸を兄と二人で歩いていると、二人の下駄のほかに、後ろに〝第三の下駄の音〟がきこえる。ハッと気づいたが、恐怖のために後ろをふりむくことができない。だんだん冷汗がでてきて、恐怖はつのるばかり。ついに二人はかけだして、家に帰った。

そして、おばあさんにその話をすると、

「それは、べとべとさんや」

「ほう」

とその時はじめて、僕たちは『べとべとさん』の存在を知った。

さらに、

『そういう時は〝べとべとさん先へおこし〟といえば、下駄の音だけが先にゆくのだ』

と教えられた。

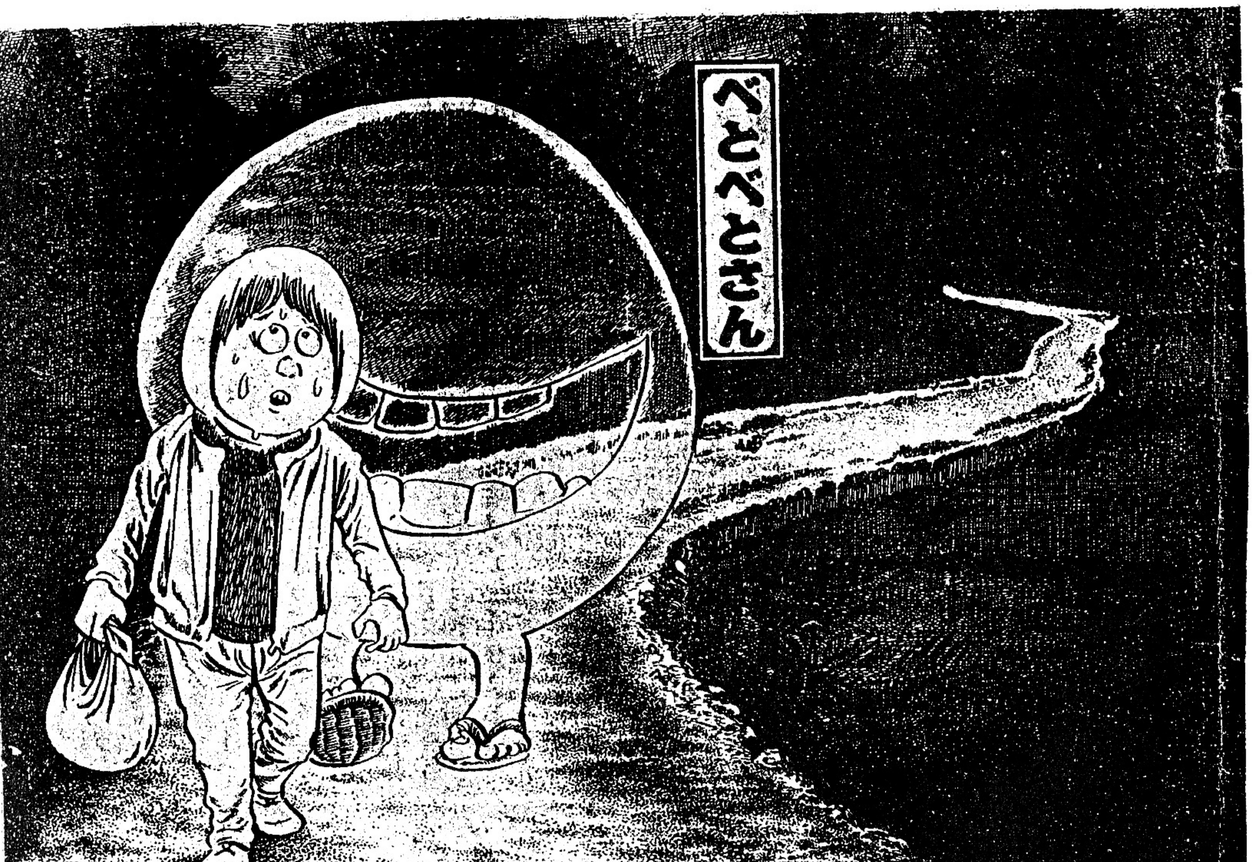
やはり、そういう〝音の怪〟ともいうべきものは、いるのだ。

諸君も、なにか不思議な妖怪体験があれば、ただちに僕のところに手紙を送ってほしい。

妖怪の正体をつかむのも、そう遠いことではないかもしれない。

ひょっとしたら、〝宇宙人〟と考えられなくもないが、そうだとすると〝宇宙人〟はかなり古くからいるということになる。

君たちが知らぬ間に出会っていた「妖怪」の正体をあきらかにしてくれる究極の相談コーナー『妖怪ポスト』。手紙を採用した方には二〇〇〇円分の図書券をさしあげます。あて先は〈〒一〇五—五五　港区新橋4-10-1　徳間書店・少年キャプテン編集部「妖怪ポスト」係〉まで。不思議はすべて大歓迎!!





怪奇よろずごと相談

水木しげるの妖怪ポスト



第3回

霧の様なもの

東京都港区六本木の栗山裕君という、妖怪ファンから**のびあがり**の手紙をいただいたので、ちょっと引用しよう。

ぼくの母の妹の知人のおばさんが話すのには……。

〈二十年前、姉といっしょに田のあぜ道を歩いていると、とつぜんブワーッと霧のようなものが湧き、目の前がまっ白になった。

『霧のようなもの…』が湧く前に、自動車が通りすぎていったので、最初は、その排気ガスかと思った。

しかし、間もなくもやの中から、大きな男のすがたが浮かびあがったので、私たち二人はふるえて逃げだしたのです〉

……という事でした。

その話をきいたぼくが、「妖怪なんでも入門」の中の『のびあがり』の絵を見せると、「そういえば、こんな感じじゃった」といいます。

その人は『のびあがり』を知らないし、また、先生の「続・妖怪事典」では『のびあがり』は雲とともに現れるとかいてありましたから、「霧のようなもの」は雲で、その男の姿は『のびあがり』だったのかもしれません。

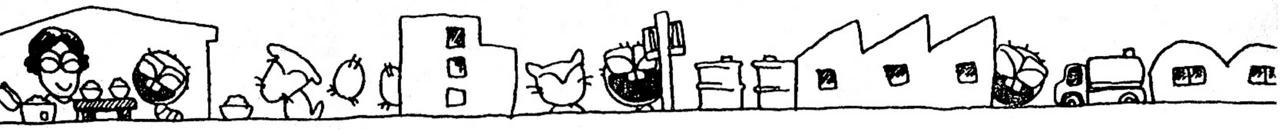
以上が、栗山君の手紙なのだが、これはあきらかに『のびあがり』である。

とかく妖怪に出会うと、その時はあわててしまうから、しかと相手の様子をつかみにくい。いわゆる、アワを食うという言葉通り、あわてふためいてしまうため、よけいわかりにくいが、あとになって「ああ、そうだったのか」ということになる。

さて、この『のびあがり』なる妖怪は、いったいどんなものであるか、少し説明しておくことにしよう。

『のびあがり』とは、その名前からもわかるように、見れば見るほど高くなってゆく妖怪である。

それは、日本全国に出没するとい



われており、**のびあがり入道**と称している所もある。つまり、読者の手紙にもあったように『のびあがり』とは、はっきりとどんな形であるということができない、雲のような霧のような入道状のものであるという訳だ。

だから、あなたがこの『のびあがり』に遭遇したとしても、多くの場合は、それが『のびあがり』と呼ばれる妖怪とは気がつかないだろう。

正体不明のわけのわからないもの。わからないから不気味なもの…。

実はそれこそが妖怪なのであり、それらのものには現在のところ（本当はずっと昔から）名称がついている。

『のびあがり』という名前ではないが、徳島県の一部地域では**高入道**という妖怪が知られており、これはあきらかに『のびあがり』と同種である。ただこれは、見上げれば見上げるほど高くなり、見下ろせば小さくなるといった類のものである。

ある地方では、こうした種類の妖怪は**かわうそ**が化けたもの――と伝えている。

そして、もしこうしたものに出会ったときには、地上三十センチくらいの所を蹴るか、目をそらせば消えるといわれているから、妖怪とはいっても、『のびあがり』は人間に害を及ぼしはしないようだ。

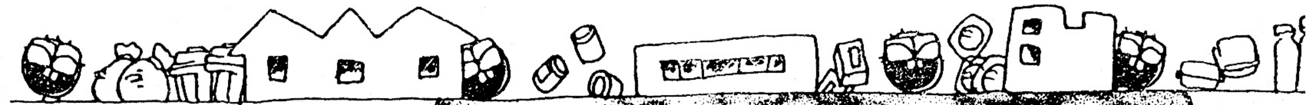
あわてず騒がず、じっとしていれば『のびあがり』は、のびあがるだけのびあがって空いっぱいになると、自然に消えるともいわれている。

また、これに似た妖怪というと『ゆきあい神』とか『しょうろう風』といったものもあるが、それは私の「妖怪事典」をみていただければわかると思う。

好評のうちに第3回までできた『妖怪ポスト』。また来月も、水木しげる先生があなたの出会った妖怪をピタリとあてます。

手紙を採用した方には二〇〇〇円分の図書券をさしあげます。あて先は〈〒一〇五―五五 港区新橋4―10―1 徳間書店 少年キャプテン編集部「妖怪ポスト」係〉まで。〝不思議〟の正体が、いま明らかに!!





水木しげるの妖怪ベスト

怪奇よろずこと相談

第4回 闇に響く声

今月の不思議体験は…

高校一年の冬でした。

夜の十時頃、家へ帰る途中の一本道を歩いていました。街燈はついていましたが、うす暗く、前にも後ろにも人っ子一人いない夜道で少しこわかったので、石ころをけりながら歩きました。

二回、三回…とけり続けましたが、相変わらず人は通らず、聞こえるのは自分の足音と石の転がる音だけです。

七回目くらいだったでしょうか。勢いあまって石をドブにけりこんでしまいました。

ポチャという水音に一瞬おいて

「いてっ」

と声がしました。

思わず立止まり、前後左右を見まわしました。しかし誰もいませんでした。その辺りには、家もありませんでした。途端にこわくなり、走って帰りました。

色々考えましたがわかりません。一体あれは何だったのでしょう。

（千葉県　田中緑）

というお便りなのだが、これは**こそこそ岩・パタパタ石**の親類と思われる。こそこそ岩というのは、石の精が棲むといわれている岩のことで、昔、岡山県のとある村にこそこそ岩という岩があった。

なぜこんな名前がついたかというと、岩の中からこそこそ、こそこそと音がしたからだ。便りを拝見する限りでは、石がどぶに落ちたときに「いてっ」という声がしたとあるが、おそらくそれは、石そのものが音を発したのではないかと思う。そこに誰かがいた、というよりも、そう考えたほうがよいだろう。

石や岩の中に何らかの生物がいたという話は昔からいくつかある。その一つを紹介しておこう。

新潟県西頸城郡の旧小滝村には、物岩という大きな岩がある。

山岸七兵衛という男がよく訴訟を起こしたがこれをうらめしく思っていた男がいて、あるとき七兵衛を殺そうと彼を誘いだした。

ところが七兵衛がその誘いにのって出かけたところ、ある岩の中から

「今度行きゃ、殺されるぞ」

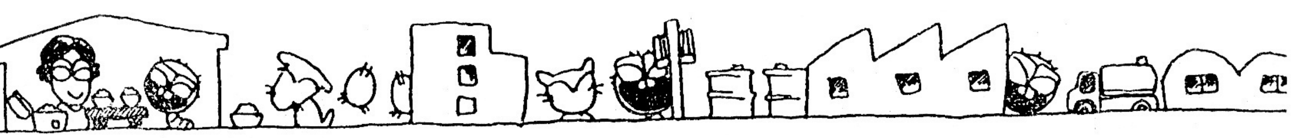
と声がした。

七兵衛は不思議に思ったが、結局その声の忠告に従って命拾いをした。以来その岩は、ものを言う岩として物岩と呼ばれるようになった。

また、石の中から魚が出てきたなどという話も古くから伝えられている。

だからこそこそ岩というのは、人間と同じように声を発する岩のことである。

次にパタパタ石だが、これにも次





のような話があるから、その話をもって読者の回答にしたいと思う。

ある夜、遠くでパタパタと、畳をムチで叩くような音がした。

その音に近づこうとするとだんだん離れるように聞こえ、離れるとどんどん大きく聞こえてくる。音はどこから聞こえてくるのかさっぱりわからない。音は四キロ四方に渡って鳴り響く。

そこで、この土地のある老人が、音の正体は、村の中心にある竹やぶにあると考えた。

老人は昼間から竹やぶに入って音の聞こえてくるのをじっと待った。すると、竹やぶのすみにあったつけもの石くらいの大きさの石からパタパタという音がしだした。

老人がはっとして石を見ると、その石の陰で小さな生き物がパタパタと手を打っていた。あわてて近寄ろうとすると、その生き物はすぐに石の中に入ってしまった。

老人はその石を大事にもって帰った。そのときは何でもなかったが、それから数日すると老人の顔にぽつんと小さなアザができた。

そのアザは日がたつにつれ次第に大きくなり、ついには老人が待ち帰った石と同じくらいの大きさになってしまった。

老人はびっくりして、その石をもとの場所に返した。石を返してしまうと、老人のアザはすっかりきれいになくなってしまったという。

だから読者のけっていた石というのは、案外こちらのパタパタ石に近いかもしれない。



お便り募集

大好評の『妖怪ポスト』。あなたの不思議体験をお寄せください。水木しげる先生が解明いたします。

手紙を採用した方には二〇〇〇円分の図書券をさしあげます。あて先は〈〒一〇五—五五港区新橋4—10—1 徳間書店 少年キャプテン編集部「妖怪ポスト」係〉まで。

世界は〝不思議〟に満ちている!!

水木しげるの妖怪ポスト

怪奇よろずごと相談

第5回 真夜中の火



今月の手紙

これは僕の親戚の人から聞いた話です。

さる9月7日、その人は友だち4人で大分県の別府市まで、単車で遊びにいっていました。夜も11時ぐらいとなり、近道をしようということで、山道にはいったそうです。

するとしばらくして、先のほうに赤い火のようなものが見えはじめたのです。それも一つや二つではなく、四つ五つもあります。

エンジンをふかして追いかけていくと、やがてそれは人のように見えてきました。どうやら、白髪のばあさんがたいまつをふっているみたいです。さらに速度をあげましたが、やはりそのばあさんに追いつくことはできません。

と、急に人影はきえてしまいました。

みんなはホッとして走りつづけました。そして五分ぐらいたった時、4人のうちの一人がふと振りむくと、後ろ1mも離れていないところに、先ほどのばあさんが火のついた青竹をもって立っていたのです。

みんな叫びながら、それまで以上にエンジンをふかしました。しかし、ばあさんとの間は全然はなれません。

どれくらい走ったのか、我にかえった時には町のずっとはずれにある旅館まできていたそうです。

先生――これはいったい何なのでしょうか。ゆうれいでしょうか、それともキツネみたいなもの？　教えてください。

（三重・谷村明）





おこたえ

いくつもの火が見えたということから考えますと、これはきっと**狐の松明**もしくは**狐火**といわれている妖怪であろうと思われます。

人間が動物にだまされるということはけっこうあるものなのです。

とくに狐や狸（あるいはイタチや猫といったところ）が人間を化かすというのは昔からよくきかされます。

今回の場合は、谷村くん自身もいっているように狐に化かされたのだろう。

いや、

化かされたというよりも、「狐火を見た」といったほうがよいでしょう。

白髪のばあさんというのは狐がみずから化けたものだと思うが、青竹にともった火は狐が発したものに違いありません。

狐は一匹だけではなく、何匹か集まっていることが多く、この場合もそうであったのでしょう。

彼らは、ひょいと飛びあがるときに、口の中からフッと火をだします。もともとたいまつと見えたのは狐の吐く息だったのです。

これを実際に見たことのある人の話によると、ほたるの光よりも大きいのがポカリポカリと無数に連なったり、ふえたりへったりするので、だんだん気味が悪くなっていくそうです。

しかし、

これを見たからといって、べつに狐にとり憑かれてしまうというわけではありません。

安心してけっこうです。

お便り募集

好評・水木先生の『妖怪ポスト』

あなたの不思議体験を解明いたします。

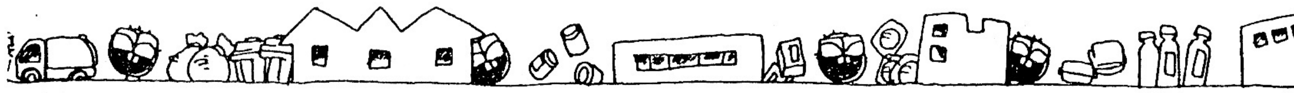
手紙を採用したかたには二〇〇〇円分の

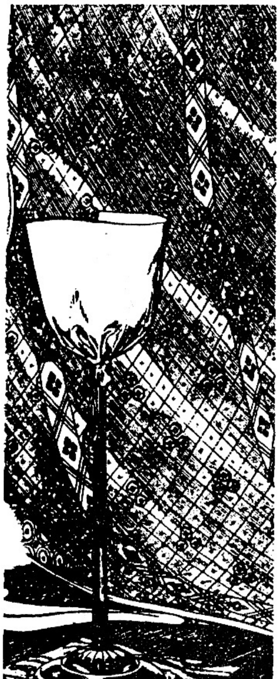
図書券を!!　あて先は——

〒105—55　東京都港区新橋4—10—1

徳間書店　少年キャプテン編集部

『妖怪ポスト』係まで。





怪奇よろずご相談



水木しげるの妖怪ポスト

第6回 髪がしばる

今月のお手紙

試験を目前に控えた一月上旬のことです。

夜遅く勉強を終え、ベッドにもぐり込んでいると、突然後ろから両肩をつかまれて、グイッと下に引っ張られるという感覚に襲われました。

驚いてはね起きると何ともなかったのですが、妖怪や霊のせいかもしれないと思うと寝るのが不安でなりません。ちなみにその直前、後ろのほうに女性（黒髪・長髪）の気配を感じました。

なお、以前から軽い金縛りや「突然地面が消え、たちまち地面の底の暗闇に落ちる」といった感覚に襲われることもしばしばありましたが、今回ほど具体的ではありません。

また、いずれの場合も意識はハッキリしているので、寝ボケているわけではないはずです。

これらは一体、何者の仕業なのでしょうか。水木先生の審判を仰ぎたくお便りしました。

（大阪府　WATS）

おこたえ

この場合、いくつかの妖怪が考えられるが、『女性・長髪の気配』ということからみると、おそらく**鬼髪**の類だと思われる。「鬼髪」というのは、女性の髪につく妖怪で、切っても切ってもどんどん長く伸びてゆくばかりか、その伸びた髪がさまざまな〝怪〟をなす





ものである。或は青女房という、女の妖怪が出現したのかも知れない。

さらにいえば青行燈という、行燈のうしろにすーっと立つといわれている女の妖怪かもしれない。

これは、髪をぼうぼうにふり乱した女が、人のくるのを待つ——という妖怪である。

お便り募集！

好評・水木先生の『妖怪ポスト』は、あなたの不思議体験を解明します。手紙を採用したかたには2000円分の図書券進呈!!
あて先は——〒105—55　東京都港区新橋４—10—1　徳間書店
少年キャプテン編集部　『妖怪ポスト』係まで。



現代では、行燈も時代劇のなかくらいでしか見られなくなったから、この妖怪をいまに置きかえると、さながら「青電気」というべきであろう。

「青行燈」は、行燈の火を消そうとすると現れる。

読者の出会ったものがどれであったかは断定できないが、いずれにしてもこれらの種類に属するものと思われる。

妖怪というものは、ハッとした一瞬とか、ねぼけた時とか、とつぜんの事件が起きてあわてふためいている時とかに出現しがちであり、とかく人間が冷静で正常な時には現れてくれないものである。そのため、しかと正体をみるのはなかなかむずかしい。

またそのなかでも、ハッキリした解答がだせるもの・出しにくいものがあり、残念ながら後者のほうの例が多いので、「妖怪研究家」としては、はなはだ苦戦をしいられている。

たくさんの人がいろいろな妖怪との出会いを知らせてくれれば、だんだんちゃんとわかってくるはずだと、ぼくは思っている。



水木しげるの妖怪ポスト

怪奇よろずごと相談



第7回 闇の迷路

今月のお手紙

それは、おばあさんから聞いた、死んだぼくのおじいさんが若いころの奇妙な話です。

あるときおじいさんが夜、共同墓地の下のほうにある橋を通りかかりました。そのときは夜でしたから、手探りで橋にさわってみました。ところが目には見えるのに、手でさわろうとしても手ごたえがないのです。

でも、仕方がないのでそこを通ってみると、どうしたことか元の場所に戻っているのです。何べん通っても同じなので、仕方なく遠まわりをして帰ったということです。

これに似た話がもう一つあります。

ぼくの近所の人のお父さんとその友達が、あるとき酒に酔って歩いていると、やはりぼくのおじいさんが変な目にあったところで急に道がわからなく



なり、仕方なくもう一方の道を通っていきました。
ところがいくら経っても家に戻らず、家族の人達が心配して探しにいってみると、港のほうの石垣にぶら下って大あわてしていたそうです。この人達の他にも数人の人達がここで変な目にあったそうです。
水木先生の『ふしぎなふしぎな話』で、香川県によくでる妖怪「足まがり」というのは〝何か人間に幻覚を起こさせる妖怪だったのだろう〟と書いてありますが、おじいさん達が変な目にあったのはその「足まがり」のせいではないでしょうか。先生は、どう思われますか？

（香川県　横山勝典）

おこたえ

というお便りですが、まずはじめに**足まがり**というのを知らない読者のために、この妖怪について説明しておこう。
〝足まがり〟というのは、路上に現れる妖怪で、主に香川県に出没する。
あわてて夜道を歩いているときなど、いきなり足に柔らかいものがからみつく。おどろいて手でさわってみると、それは綿のようなもので、じゃまになって前へ進めない。そして正体は現さず、往来の人の足にからみついては苦しめる。
これが「足まがり」というのだが、横山くんのお便りを拝見すると、どうも「足まがり」というよりは、**狸**に化かされたのではないかという気がする。
何しろ四国（特に徳島）では、狸はなんにでも化けられると信じられていて、ある地方では、この「足まがり」でさえも、本当は狸であると伝えられている。
同じような系統の話がやはり香川県にもあって、それは、**打綿狸**という。
昔、香川県の多度津郡堀町に綿打屋（精製していない綿を打ってやわらかくする商売）があって、そこの近くを歩いていると綿の塊が落ちていた。拾おうとすると動き出し、これを追っているとしまいには、空へあがってしまったという。
こんな具合に狸は何でも化けられるし、ときには列車にすら化ける。
だから横山くんのおじいさんが、橋をさわって感触がなかったというのは、おそらく、狸がその橋に化けていたということが考えられる。
いずれにしても、夜道をあわてふためいて歩いているとこの妖怪に襲われるわけだから、家へ帰るときの夜道は、あわてないでのんびりと歩くほうがよいだろう。
皆さん。不思議な体験があったら、ドシドシ知らせてください。それによって〝お化け〟がどんなものかわかってゆくでしょう。



お便り募集

好評、水木先生の「妖怪ポスト」では、あなたの不思議体験を募集しております。掲載させていただいた方には2000円分の図書券を進呈!! あて先は──〒105-55 東京都港区新橋4-10-1 徳間書店 少年キャプテン編集部「妖怪ポスト」の係まで。

水木しげるの妖怪ポスト

第8回 伸びる手の怪

怪奇よろずごと相談



今月のお手紙

ある年の夏のことでした。当時、高校生だった私は同じ年の友人と二人で大台ケ原山へ登山にいきました。

山頂の山小屋でゆっくりしようと思い、山小屋に入っていくと、いきなり女性の「キャー」という悲鳴が聞こえ、三人の若い女が「助けてー」といいながら私たちのほうにすがりついてきました。

三人の中の一人は多分、用便中だったのでしょう、ズボンは足首のところへ下げたままの格好でした。それは、よほどのことだったに違いありません。

私が、「どうした、何かあったのか」と聞くと、便壺の中から赤い手がニューッと伸びて、

「赤い紙おくれー」

といったというのです。

私はそれは「赤手」という妖怪だと思い、急いで便所にいってみました。

しかし、私の目には見えませんでした。

水木先生、あれは「赤手」だったと思ってよいんでしょうか。

（東京都／匿名希望）

おこたえ

これは、"便壺の中から赤い手が伸びた"ということから、**赤手**と思ってよいと思う。あるいは場所的に考えると**便所の神**かもしれない。

いずれにしても、どこからかニュッと手が伸びてくる現象（妖怪）というのは数多い。

まず、**手長婆**という妖怪がいる。

これは、水辺で遊んでいる子供がいると、水の中からでてきて「水の中に





「引き込んでしまうぞ」と脅したり、また、井戸端や池など危険なところで遊んでいる子供を戒めたりもする。

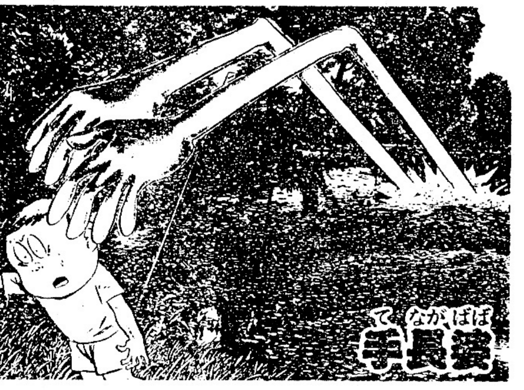
白髪の恐ろしい婆さんのように考えられているが、水の中から長い手だけしか現わさない。

また、**小袖の怪**というのもある。

むかしは着物を大事にしていたから、少々の傷があっても、直して古着屋などへ売ったもので、こんな話がある。

慶長のころ、京都知恩院前に、松屋七左衛門という町人が住んでいた。

あるとき、一人娘のために、古着屋から立派な着物を買ってやった。ところが、その着物を着てから娘は気分がすぐれず、ついに病気になった。



そんなある日、七左衛門が商売から帰って戸を開けると、顔色の青ざめた女が立っていた。着ている着物はこの前娘に買ってやったものと同じ小袖である。不思議なこともあるものだと思って見ていると、パッと消えた。念のため、その小袖を入れた箪笥を開けてみると、着物はそのままたたんで入っている。どうも気味が悪いので売り払おうと思い、そばの衣桁へ掛けておいたところ、間もなく小袖の両方の袖口から女の手のような白いものがスーッとでた。家中の者は仰天して、さてこそ怪しい小袖であると寄り集まって着物を解いてみると、肩先から大きく袈裟がけに切られている。そこをうまく縫い合わせ、藤の花の模様にして傷を隠してあったのである。

そこで家の者は、これは武家屋敷へ奉行していた女が、何か主人の怒りにふれることでもあって手討となった折に着用していた着物だったのであろうと、そのまま菩提所へ納め弔をした。すると娘の病気もようやく快方に向かったという。

この話は、同じ手が伸びるといっても、どちらかというと、怨念がそうさせたところもあるが、結局「赤手」というのも〝紙をくれ〟といっているところから、誰か便壺に落ちた人の霊のようなものだろう。

お便り募集

水木先生の「妖怪ポスト」では、ひき続きあなたの不思議体験を募集しております。掲載させていただいた方には2000円分の図書券を進呈!! あて先は――〒105-55 東京都港区新橋4－10－1 徳間書店 少年キャプテン編集部「妖怪ポスト」の係まで。
世界は不思議に満ちている…!!



怪奇よろずごと相談

水木しげるの妖怪ポスト

第9回 枕元にいるもの



今月のお手紙

ある夏の夜のことです。
居間で、夏によくやる怖いテレビ番組を見たあと、二階の自分の部屋に戻りました。
布団を敷いておいたので、あとは着がえて寝るばかりだと部屋のドアを開けたときです。
階段の電気で薄暗く浮かびあがった部屋の中、敷いてあった布団の枕元に小さな影がうずくまっていたのです。枕をじっと見つめるように。まっ黒い影でした。
私がその影を認めると同時に、その影も私がドアを開けたことに気づいたのか、半びらきになっていた押入れに、飛び込むように隠れてしまいました。
五歳くらいの男の子のような感じでしたが、押入れに飛び込むスピードが人間のものではなかったこと、気配があったにもかかわらず物音も――それどころか息づかいも聞こえなかったこと、が不気味でした。押入れの中を確かめましたが、誰もおらず、何もなかったのです。
怖いテレビを観てきたあとだったから、幻でも見たのだろうと皆は言います。でも私はそういった暗示にはかかりにくいタチなのです。
家は当時はまだ築五年にもならない新しさ、それ以前も以後も特に変わったことはおきていません。
あれは一体何だったのでしょうか。いまも時々、ドアを開けるのをためらってしまいます（静岡県／首藤明子）



おこたえ



座敷童

これはなかなか断定しにくい。五歳くらいの子ども――ということから考えると、まず**座敷童**という妖怪が一番に浮かびあがる。

「座敷童」というのは家に出る子どもの妖怪のことだ。

東北の遠野地方でよく聞かれるが、これは全国各地に現われ、この「座敷童」がいる家はよく栄えるといわれている。

次に、黒い影ということから**黒坊主**という妖怪も考えられる。

これは、深夜、人の寝息を吸い、口をなめる。確かな姿はよく分っておらず、人の目にはぼーっとおぼろげに見えて、幽霊とも妖怪ともつかない。



黒坊主

或は、枕元をじーっと見つめていたということから、**枕返し**であったかも知れない。

「枕返し」というのは、人間が夜、寝ている間に、枕をあらぬ方向に持っていってしまうという、いたずら小僧のような妖怪である。

ただ、「黒坊主」や「枕返し」というのは人間が夜、寝ているときに現われるから、目が覚めているときに遭遇したとなると、やはり一番最初にあげた「座敷童」と考えたほうがよいかも知れない。

「座敷童」は、ときにその家の子どもと遊んだりすることもあるが、そのときには誰もそれが「座敷童」とは気がつかない。

皆は幻を見たと言っているようだがこの目撃談はなかなか貴重というべきであろう。



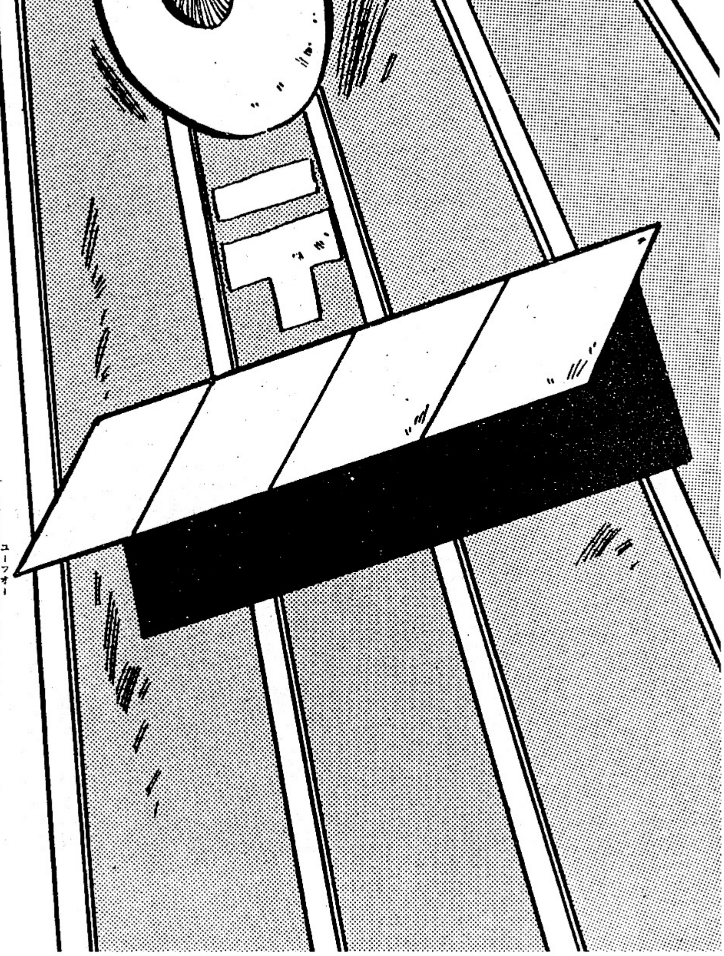
枕返し

お便り募集

水木先生の「妖怪ポスト」では、あなたの不思議体験を募集しております。掲載分のおたよりには図書券２０００円分を進呈!! あて先は――〒105-55 港区新橋４―10―1 徳間書店 少年キャプテン編集部 「妖怪ポスト」の係まで。

キミも水木先生と一緒に〝不思議〟を解明しよう!!





ただよう光

今月のお手紙

私の父が小学生のころ、友だち五、六人と森に遊びにいったら、木立の中に青っぽく光るものが浮いていたそうです。近寄ってよく見たところ、円盤のような形をしていました。

じっとながめていると、父たちのことを追いかけてきました。父は死にもの狂いで逃げたそうです。

家に戻り、もう一度今度はアミやカマ等をもっていってみたら、もうその辺には何もなかったとのことです。これはUFOだったのでしょうか、それとも……？　いまだにはっきりしたことがわからないのです。

また、私の祖父も以前、奇妙なものを見ています。夜、田んぼのあぜ道から山のほうに向かって、沢山のちょうちんのあかりが動いていったそうです。"きつねの嫁入り"ではないかといっていますが、本当のところはわかりません。人間でないことは確かだそうです。人の姿はなく、見えるのはちょうちんだけでしたから…。

この2つの話は本当です。両方とも埼玉県上尾市での体験です。

（大宮／岡安寛子）

おこたえ

近頃は、得体の知れないものを見ると、やたらにUFOではないかと騒ぎたて、本物の妖怪を見失う傾向があるが、妖怪はちゃんといるのである。

これもUFOであるかも知れないといっているが、やはり**人魂**であったろうと思われる。

〝人魂〟にもいろいろな種類（たとえば色や形、飛行具合など）があって、目撃談も千差万別である。

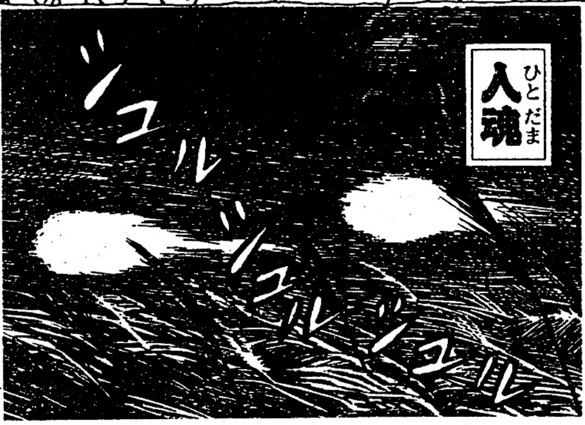
〝人魂〟というのは死者の霊魂のことだが、（しかし、これも確かなことではない）老人と若者とでは飛び方などがまるで違い、一般に、老人のものは低く弱く、若者のは元気よく飛ぶ。あるいは地を走るように飛ぶ場合もある。

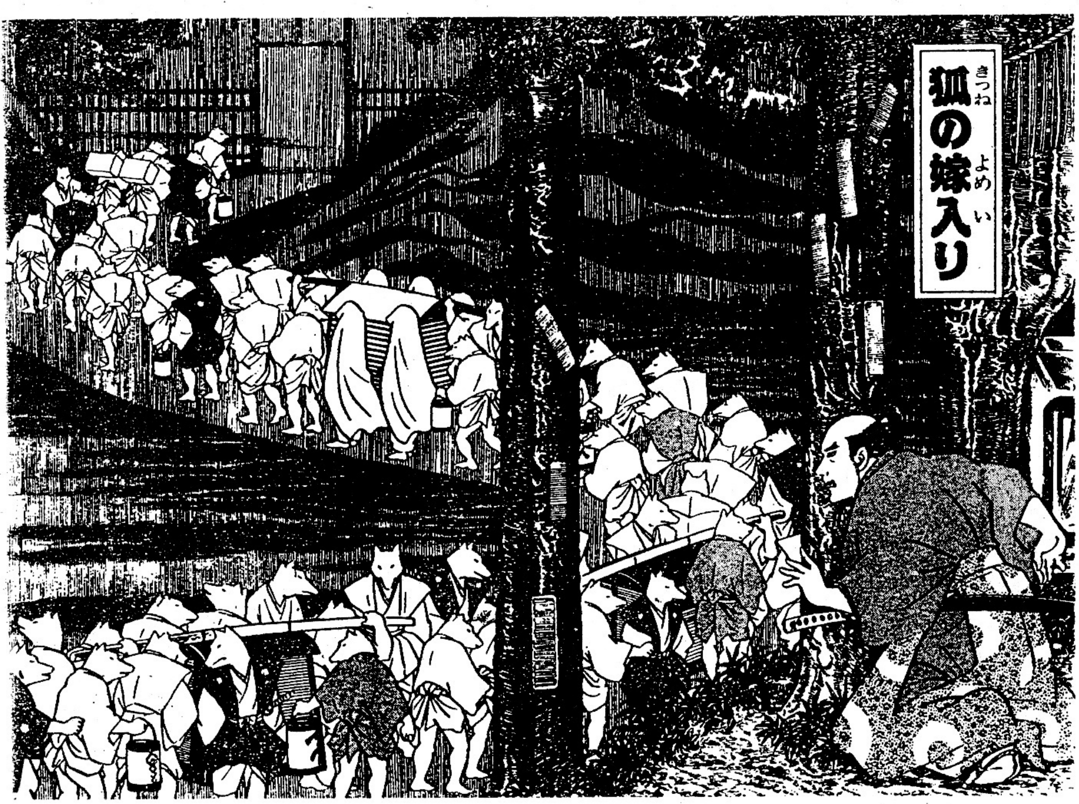
そういったことを考えると、これは若者の人魂ではないかと思う。そして、この人魂というのは、人間に害を加えることはないから見たからといって恐れることは何もない。

次に、ちょうちんの行列のことであるが、人の姿はなくちょうちんだけだったというから、やはり**狐の嫁入り**といわれているものではないかと思う。

これも昔からよく目撃されているもので、特に、雨のそぼ降る日などに現れる。そして、これは誰の目にも見えるというわけではなく、福島県などでは、陰暦十月十日の夕方、すり鉢を頭にかぶり、すりこぎを腰にさして豆柿の下に立って見ると〝狐の嫁入り〟が見えるという。

いずれにしても、おじいさん、お父さんの頃は、なぜか〝妖怪〟を目撃した人が多い。今でも時々〝出会う〟人がいるが、どうしたわけか、たいてい田舎のほうだ。







水木ワールド ついに漫画で登場!!
今月号に「河童の三平」掲載!!
一七二頁を見よ!!

怪奇よろずごと相談

水木しげるの妖怪ポスト

第11回／蛇のはなし

今月のお手紙

私の家の天井裏に、大きな「ヤマカガシ」が巣くっています。

ヤマカガシという蛇は、普通六〜七十センチぐらいの体長だそうですが、うちに巣くっているのは二メートル近くもあり、太さは缶コーヒーの缶ぐらいあります。

昼間は弟の部屋の押入れの中で眠って、夜になるとズルッ、ズルッとロープを引きずるような音をたて、エサを求めて天井裏を動き回っています。

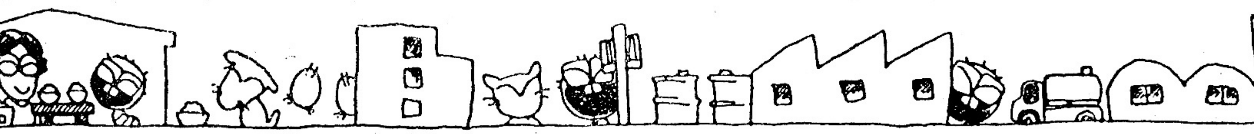
よく、蛇が家に棲みつくと縁起が良いといいますが、昔読んだ本に、逆に家の人が災厄にあう場合もあるとありました。ケタ外れに大きい蛇なので、後者のほうではないかと心配です。

四年ぐらい前に部屋の増築をしたとき、知りあいが見つけて遠くに捨ててきたのに、もどってきて再び巣くうようになっています。ひょっとして「家の主」でしょうか。

しかし、家の中はあまり穏やかではありません。母は病気で入院していますし、弟は高校を中退してしまうし、私は私で病気になってしまいました。

一体このヤマカガシは「家の主」でしょうか。それとも「疫病神」でしょうか？　先生の力でこの問題を解決していただけませんでしょうか。恐縮ですがよろしくお願いいたします。

（千葉県K・K）





おこたえ

蛇の怪というのは昔から数多くあるが、まず初めに、それらを少し紹介しておこう。

まず、**蛇骨婆**という妖怪がいる。

これは、右手に青蛇、左手に赤蛇を持ち、それをあやつりながら人を襲うというものである。

この場合は、蛇が害をなすというよりも、蛇をあやつる蛇骨婆自体が妖怪であるから、そのヤマカガシとは関係ないだろう。また、一部の地方では、蛇はたしかに**疫病神**と考えられている。

日本には各地に「蛇塚」といわれるものがあり、これをあばいたり、いたずらしたりする者には災いがあるともいう。

昔から、蛇は神の使いといわれ、三輪山伝説(注①)の昔においては、へびそのものが神であった。

こういう信仰が後になって〝神の使い〟となり、果ては〝家・屋敷の守り神〟になったのだ。

蛇とムカデは毘沙門さん(注②)のお使いともいわれ、殺したり、傷つけたりすると、三代たたるという地方もある。これは前述の疫病神と同じ系例のいいつたえだろう。

昔から、土蔵や倉の中に住みつく蛇は多く〝土蔵の守り〟といわれた。それは、貯蔵物に害をなすネズミを食べてくれるからだと思うが……。

K・Kさんの家の蛇は、今のところ別に悪いことをしていないように思えるので、そのまま気にせずにいればいいのではありませんか。

まあ、縁起の良い動物といわれても、蛇はあまり気持ちのよいものではない。

昔から、蛇を家に入れない方法として、神仏に供えた花を家の中でいぶすとか、線香をたく等の方法がある。家の周りにぬかをまくとか、鉄製のものをみせると蛇は近よらぬ、ともいわれる。

念のため、駆除法も書いてみました。



(注①)…三輪山は奈良県桜井市にある山。古事記によれば、この山の神は蛇神であり、美男に姿を変えて人間の娘に逢いにきたという。

(注②)…仏教の善神毘沙門天のこと。仏法をまもる神といわれるが、日本では七福神の1人として有名。

水木しげるの妖怪ポスト

怪奇よろずごと相談



第12回 影女

今月のお手紙

水木しげる先生こんにちは。
僕は五年ほど前、奇妙なものを見ました。

合宿にいったときのことです。窓の外に見える自動販売機の電灯が、点滅したかと思うと「フッ」と消えました。その直後、女の影のようなものが「スーッ」と通りすぎ、次の瞬間、電灯がついたのです。

これは妖怪なのでしょうか？

だとしたら一体なんという妖怪ですか？ 水木先生、教えてください。

鳥取／竹内 丈（17才）





おこたえ

これは影女であったろうと思う。おそらく影女妖怪の出現するときというのは何かしら前兆があるもので、自動販売機の点滅というのがそれにあたる。

また、物の怪の宿った家には月光がさすと女の影が映るといわれているが、男だけで暮らしていると、その家に「影女」が棲みつくことがあるらしいのである。

江戸時代にはこんなこともあった。ある武士が、雨の日に友人をたずね、門の前で傘をつぼめようとすると、窓に若い女の影が見えた。そこで友人に
「誰か女の人がおるのか」
と聞いたところ、
「わしは家内が亡くなってから、家に女は置かない」
という。

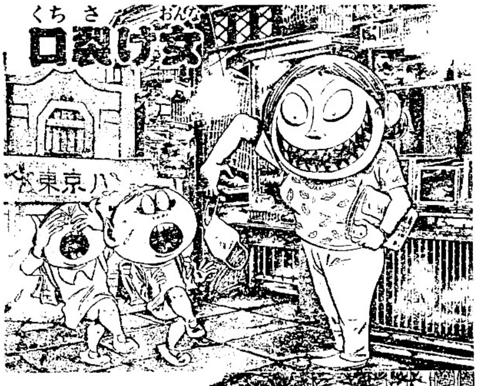
二人が酒をくみ交わしていると、今度は障子に女の影が映ったので、武士はすかさず、
「やはり女がいるではないか」
と障子を指すと、友人は、
「あれは影女だ。あれがでると家に化け物が集まるというが、こんなときは化け物でも女っ気のあったほうがいいものだね」
といって笑った。

そうすると、庭のほうに美しい女が現れたがこちらには近づいてこなかった。

やがて酒もおしまいになったので外に出ると、門前に、変な老婆が首に鉦鼓をかけて歩いているのが見える。
「変な婆さんだなあ」
と思ってふり返ってみると、門の前をいったりきたりしていた。

二人は、もしかしたら、これが「影女」の正体だったかもしれないと語り合った。

まあいずれにしても、「影女」というのは人魂のようなもので、不気味ではあるが、こちらに害を及ぼすようなことはないから安心していいだろう。





路上に現れる女の妖怪としては、ほかにも、口裂け女や骨女というのがいるが、君の見たのは、やはり「影女」だったのだろう。

ぼくはこういった妖怪っていうのはやはり〝霊〟に関係があるのだろうと思う。

お便り募集

水木先生の「妖怪ポスト」では、あなたの不思議体験を募集しております。掲載分のおたよりには図書券2000円分を進呈!! あて先は――〒105-55 東京都港区新橋4-10-1 徳間書店 少年キャプテン編集部「妖怪ポスト」の係まで。
キミも水木先生と一緒に〝不思議〟を解明しよう!!



怪奇よろずごと相談

水木しげるの妖怪ポスト

第13回
真昼の人影

今月のお手紙

私が小学校五年生の頃のことです。自宅は学校の裏門から見えるマンションの5階でした。ある日、学校帰りにふと見上げると、私と兄の部屋に面したベランダに、奇妙な人影が見えたのです。

それは、頭がつるつるの小さな老人でした。

身長一メートルそこそこで丸っこく異常な体形をしており、見る間にスッと体をかがめ、ガラス戸をあけて兄の部屋へ入っていきました。

私は走ってマンションに帰り、おそるおそるカギを開けて家に入りました。お天気のいい日でした。午後の二時頃なので家中明るく、さっきほどの恐怖心はありませんでした。思いきって兄の部屋に入ってみるとベランダのカギがかかっており、もちろん、誰もおりませんでした。

それだけのことですが、ベランダに奇妙な風体のだれかがいたのは、たしかだったのです。指さして友人に教えようとしたとき、人影はすでに部屋の中に消えていたので、見たのは私だけでしたが。

私の家は五階の角でとても目立つところにあるのです。絶対に見まちがいではないと思うのですが……。

先生、あれは一体何だったのでしょうか――。

（文京区　谷口典子）



おこたえ

これは
おそらく**ぬらりひょん**か、あるいはその親類だと思う。

夕方、人々がせわしくしているときに、どこからともなくやってきては、勝手に家の中にあがり込む。そして座敷でお茶など飲んだりする。ときには主人の煙管を使ってゆうゆうと煙草をふかしていることもある。

姿は僧のような場合もあるが、たいてい商人のような格好をしていて、しかもそれが大店の旦那ふうにゆったりと歩く。どこからきてどこに帰るかはまったくわかっていないが、いつも自分の家であるかのように入ってくるから誰も注意しない。

この「ぬらりひょん」は、妖怪の総大将ともいわれているから、このような振舞いが許されているのかもしれない。ともかく、用もないのに勝手に家の中に入ってくる性質がある。

そして、別に人間に害を加えるということもない。しかし、それだけに人人は忙しさにまぎれて正体を見きわめることをしない。

また、むこうもその辺は心得たもので、そんな人々がバタバタしているときでないと、姿を見せないといわれている。

五、六年前だったか、ぼくは新宿で、人間ではあるが人間でなさそうなお方を発見したことがあった。

たしかにどことなく違うのだ。誰も忙しさにまぎれて気がつかないふうだったが……。

たまには「異物」も混っているのだ。ぼくはときたま妖怪の講演にゆくことがあるが、いつも二人（いや二匹というべきか）くらいはちょっと普通でないお方が混っているのを見受ける。

こういうのが「ぬらりひょん」の一種かなあーといつも思う。

「倉ぼっこ」とかいって、倉に住みつく小型の妖怪も、あなたが見た妖怪に近い。しかし妖怪というのは、霊に近くこの世のものでないから、壁なども問題なく、自由に出入できるのだが、それを見るのは、ある選ばれた人だけではないかと思う。

お便り募集

水木先生の“妖怪ポスト”ではあなたの不思議体験を募集しています。採用した方には２０００円分の図書券を進呈!! あて先は——〒105-55 東京都港区新橋4-10-1 徳間書店 少年キャプテン編集部「妖怪ポスト」の係まで。

次回はいよいよ最終回、ふるってご投稿を!!

水木しげるの妖怪ポスト

怪奇よろずごと相談

最終回



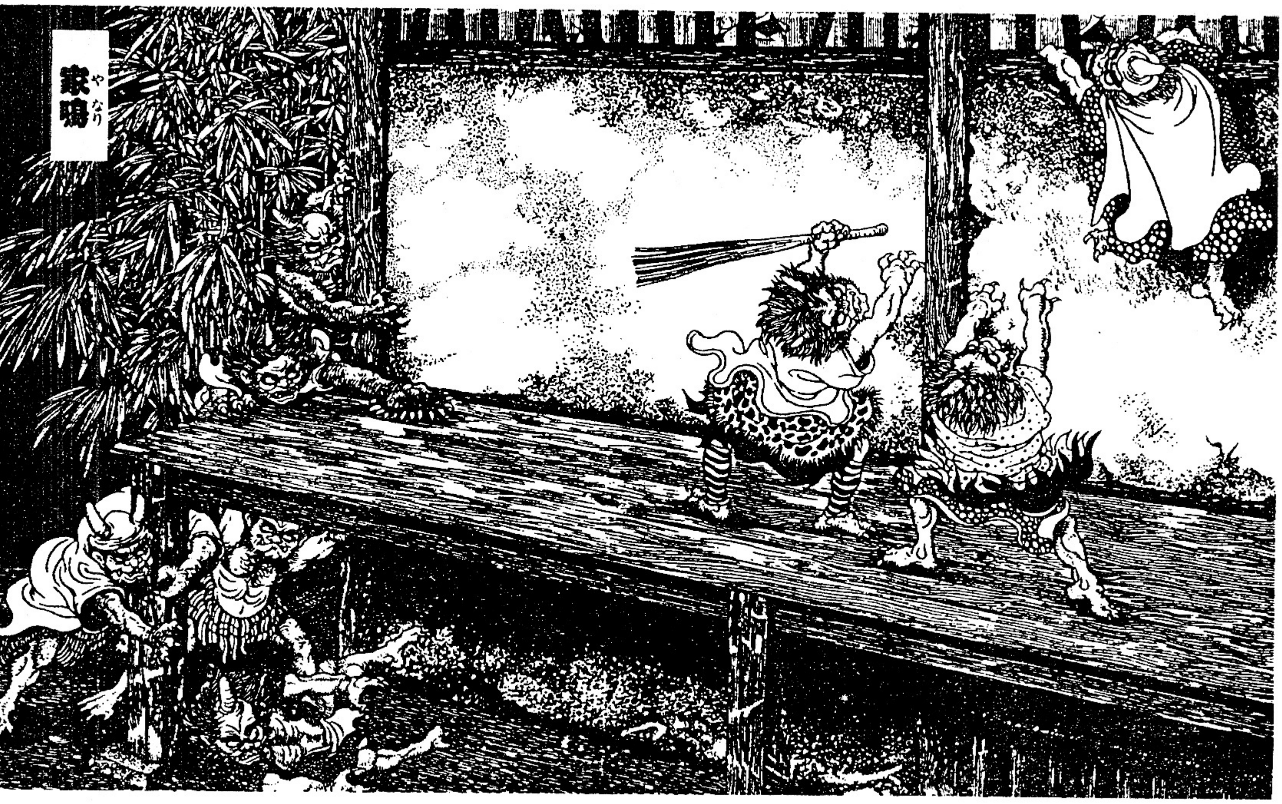
「妖怪ポスト」今回は最終回特別篇ということで2本立てでお送りします。
水木先生の世界をたっぷりとご堪能ください。

その1 ノックの音が…

今月のお手紙

こんにちは、先生。初めてハガキを出します。
あれは高校受験間近の冬休みのことでした。
その日は風がまったくなく、雪がしんしんと降っていました。
その頃の僕の部屋の入口はふすまでしたが、夜中に勉強していると、ドンドンとふすまをノックするように叩く音がしました。
両親や弟は寝ている時間でしたが、用があれば入ってくるだろうと返事もせずにいたら、少し間があって、またドンドンと音がしました。
うるさいなと思い、
「なーに?」
といいながらふすまを開けましたがそこには誰もいませんでした。
僕は霊感はなく、UFOなども見たことがないので幽霊ではないと思います。
この正体はいったいなんだったのでしょう、今でも気になります。

牛崎吉一



おこたえ

この音の正体は、やはり**家鳴**ではないかと思う。

ひところのオカルト・ブームで〝ポルターガイスト〟という言葉も、現在ではよく知られるようになったが、これを和訳すると「家鳴」ということになる。

これは、地震でもないのにガラス窓やドアがドンドン、バタバタと鳴る一種の怪奇現象のことだ。

これは日本各地はおろか、外国でもよく知られている現象である。日本では昔から、この現象を小鬼の仕業であるとして、そうした絵も残されている。



この「家鳴」が起きたから何かあるということはないが、風もなく、誰もいないのにドアなどがドンドン鳴るというのはやはりあまり気持ちのよいものではない。

ガタガタと鳴るだけならまだいいが、アメリカのロングアイランド島のある家では、洗面所の化粧びんや香水のびんのふたが、突然勝手にポンポンと抜けて飛びあがり、大騒ぎになったという話もある。

きみの体験したのはふすまをたたく音だけだったというから、これなどはほんの序の口の「家鳴」と考えてよいだろう。

また、ドンドン、バタバタと音を出させる妖怪というのは他にも**畳叩き**がいる。

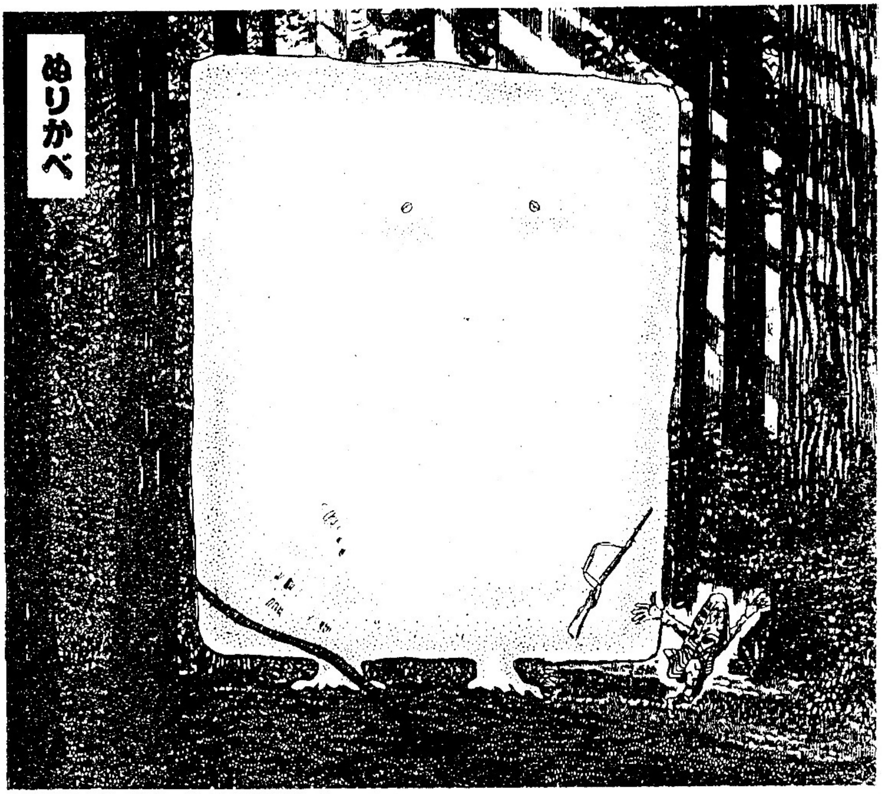
これは別名を**バタバタ**といって、夜中に畳を叩くような音をたてる妖怪である。

和歌山県では、これが現われるのは冬の夜に限られているといわれているから、読者の体験した〝ドンドン〟という音も、もしかしたら「畳叩き」であったかも知れない。

いずれにしても、どちらも家に〝憑く〟ような妖怪ではなく、一時的なものだから、あまり気に病む必要はない。

妖怪は、気づきやすい人とそうでない人がいて、この「家鳴」などは昼間の騒音の中ではそうと気づかない場合が多い。

やはり、しんと静まり返った夜中に現われることが多いわけだが、きみは妖怪感度がよいのだろう。



その2 立ちはだかるもの

今月のお手紙

私は高校生で、受験勉強に追われる日々を送っています。

そんな中で、時々、不思議なことがおこるので、水木先生にお話しします。

まず……数学などの問題を解いていて、どうしても計算が合わない、何度やってみてもおなじ結果が出て、どうしても正しい答えが出てこない。そして、ひどい時など何とかまちがったところに気づいても、計算していると、その同じところをまたまちがえてしまい、とうとう投げやりになってしまう。

ところが、居間でテレビを観、台所でコーヒーを飲み、それにも飽きてまた勉強を始めようとしてさっきの計算をすると、あっさりと正しい結果が出るのです。

なんでもないことのようですが、このようなことは他にもあります。

そこで、私は自分なりにこれらのことを考えてみました。そして、これは一種の「ぬりかべ」なのだという結論に達したのであります。水木先生はどう思われますか。

白川　悟

おこたえ

白川くんはこの**ぬりかべ**を、実体のあるものではなく〝精神的ぬりかべ〟ではないかとの見方をしているようだが、これは全く正しい。

「ぬりかべ」というのはもともと、路上を歩いているときに出くわし、これに出会うと一歩も先へ進めなくなるものだが、何かをやっていて、同じ箇所で何度もつまずくというのは、やはり「ぬりかべ」の仕業である。

こういうときに一番大切なことは、何といってもまず落ち着くことである。

夜道を歩いているときなどこの「ぬりかべ」に出会ったら、とにかく一服するというのが鉄則である。

だから白川くんが、コーヒーを飲んだり、テレビを観たり、要するに一服したから「ぬりかべ」から解放されたのだろう。

つまずいたところで立止っていても、「ぬりかべ」に出会うと絶対に前には進めないものだ。

現代では、妖怪も出現しにくくなり、仮に出会ったとしても、そんな話をすると一笑に付されてしまうか、あるいは精神が錯乱していたのだろうとの見方をされてしまうが、そうとばかりはいいきれないことや現象が、この世には存在する。

ぼくも、第二次大戦中、偶然これに出会ったことがある。

暗いジャングルの中で仲間とはぐれてしまい、一人で空腹をかかえてさ迷っていた。

前へ前へと進んでいたのだが、ある所にきた時点で、突然何者かに行く手をはばまれた。押してみると岩ではな



く、しいていえばコールタールを固めたようなもので、右に行っても左に行っても前に進むことができない。しかもジャングルなので真暗で何も見えない。

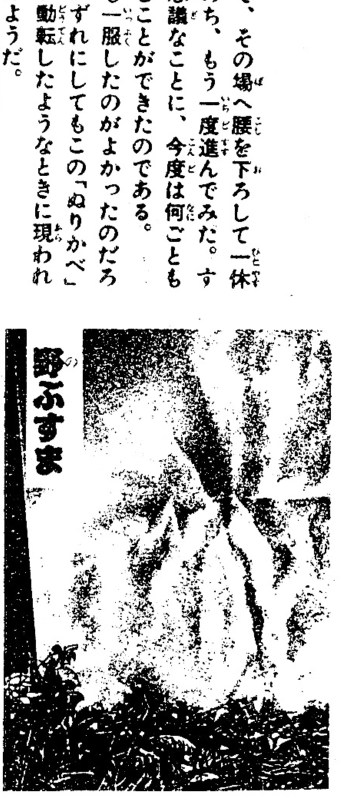
途方にくれるというのはまさにこのことで、二、三十分ぐらいだろう、動くことが全く封じられてしまった。

そこで、その場へ腰を下ろして一休みしたのち、もう一度進んでみた。すると不思議なことに、今度は何ごともなく進むことができたのである。

これも一服したのがよかったのだろうが、いずれにしてもこの「ぬりかべ」は、気が動転したようなときに現われる妖怪のようだ。

だから、受験勉強なども、がむしゃらにやることばかり考えないで、適当に小休止することも必要なのではないだろうか。

つけ加えておくと、この「ぬりかべ」は、**野ぶすま**と同類のものである。





「妖怪ポスト」は今回をもちまして、ひとまず終了とさせていただきます。長い間応援ありがとうございました。

しかし、水木先生の妖怪研究がこれで終わったわけではありません。今後も、よりいっそうの情熱をかたむけて先生は研究をつづけられるでしょう。皆さんからの情報がその助けとなることはまちがいありません!!

妖怪情報や不思議体験、はげましのお便りなどありましたら、ひき続き少年キャプテン編集部気付でお寄せください。必ず水木先生にお届けします。

水木ワールドの扉が、いま、ゆっくりと閉じようとしています。またいつかお会いするその日まで……。

― 妖怪ポスト 第12回 影女― の解(快?怪?)説

この採用された話、実はもう少し奥が深いものだったのです。女の人の影がスーッと横切った後、窓を開け辺りを調べまわしたのですが誰もいなかったのです。しかし、只これだけでは単なる僕の見まちがいである可能性はあるのですが、次の日の朝、僕が昨夜の事を話そうとした瞬間、友人の口から全く同じ事件がついて出たのです。すると僕だけでなく、部屋の友人みんながギョッとしたのです。

そう!部屋にいる奴等みんなが見たのです!しかも別々の時間に!!これでは完全に見まちがいだとか、夢だったとか言ってしまう事はできぬだろう。同時に(少しづつずれてはいるが)同じ夢を見たとは考えられぬのだから……。だから僕は胸をはって言おう!!「影女を見た」とッ!!

――――ちなみに、キャプテンで採用されたこの話、かなり原文と異なっていて、特にひどいのが、「これは妖怪なのでしょうか?だとしたら一体なんという妖怪ですか?僕は影女だと思いますが…。水木先生、教えて下さい。」の"僕は――。"がカットされていた事です!これはきっと徳間の編集部のしわざ!ゆるすまじ 徳間書店!!(でもまだキャプテンは買っている…。本当は好きなんだよ徳間書店が…〔笑〕)

No.61 竹内 丈



イラスト・No.61 竹内 丈

ありがとう

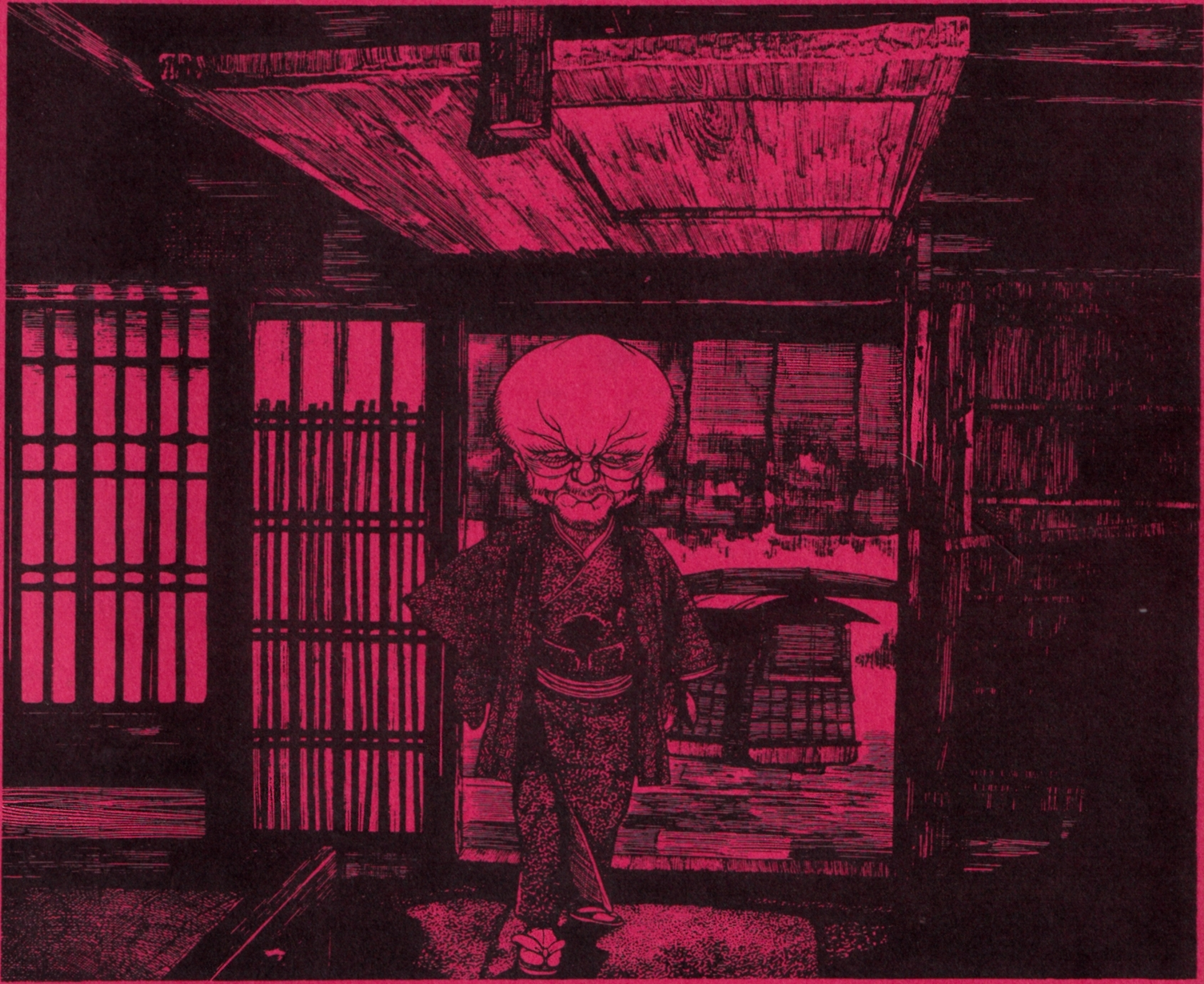
昭和６３年１月、水木しげるファンクラブが結成された記念すべき日である。最初の名称は『水木しげる黄金時代愛好者倶楽部』。たった５人からスタートしたファンクラブであったが、この５年間の間に雑誌に紹介され、新聞に報道され、今では会員総数１００人を軽く超えるようになった。結成当時から考えると信じられないくらい進歩したと思いまう。それらもひとえに寛大な配慮で我々を公認サークルとして活動を許して下さっている【水木しげる先生】と【水木プロの方々】、ノーギャラなのにいつも頑張ってくれているスタッフのみんな、それから、応援してくださる会員の皆様。特に、会員の皆様の中には原稿を書いてくれる方や資料提供してくださる方、影の力となり『水木しげるＦＣ』の発展の原動力となったのはいうまでもない。いつもお世話になっているのに何のお返しも出来なかったのですが「これじゃいけない!」と思い付いたのが『水木伝説·非売品シリーズ』です。この、小冊子が手元に届いた貴方。これは、『水木しげるＦＣ』が貴方に送った言葉として本棚の隅にでも納めていただきたい、ありがとう、と…

おくづけ

水木伝説·非売品シリーズ 1
【水木しげるの妖怪ポスト】

平成４年（１９９２年）１１月１日発行
発行部数／限定１００部
表紙／水木しげる（東京堂出版『続・妖怪事典』より抜粋）
編集／馬場茂幸
編集協力／瀬戸信行、竹内丈
資料協力／北迫耕治、竹内丈
多謝／水木しげる先生、水木プロの皆様
印刷／大阪出版株式会社
制作・発行／水木しげるＦＣ・水木伝説

〒６５４−０１
兵庫県神戸市須磨区北落合３丁目３８番地２１７号棟７０９号室
☎（０７８）７９２−９６５７



制作・水木しげるＦＣ　水木伝説